

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520837

研究課題名（和文） 北海道南西部における異民族間交流史の民俗学的研究

研究課題名（英文） Folkloristic Study on the History of Inter-Ethnic Exchange in Southwest Hokkaido

研究代表者

舟山 直治 (FUNAYAMA NAOJI)

北海道開拓記念館・学芸部・学芸員

研究者番号：90181445

研究成果の概要（和文）：

近世期の和人地と蝦夷地を区分していた内浦湾沿岸の境界に着目し、民族の居住を振り分ける境界線が近代になくなるまでの神社祭祀の変遷をまとめた。また、近世期に蝦夷地と隣接していた日本海沿岸の檜山地方を対象に神社祭祀の過程を明示した。そのうえで、渡島半島の東西の神社祭祀のデータを基に、分水嶺をはさんで渡島半島の東西に流れる河川流域に祀られた神社の祭祀形態を対比させ、信仰面から和人とアイヌとの境界域の習俗の抽出を試みた。

研究成果の概要（英文）：

For the Uchiura Bay area, focus was placed on the early modern boundary drawn to demarcate Wajin-chi and Ezo-chi at the end of the 18th century where shrine rituals were identified that existed until this border was eliminated in modern times. For the Sea of Japan coast, light was shed on the shrine rituals during the early modern period in the Hiyama region, which is located next to former Ezo-chi. This study utilized previous data to compare the style of shrine rituals performed in the river basin flowing to east and west through the dividing range on the Oshima Peninsula and attempts to identify the religious practices of the Wajin-chi and Ezo-chi along the boundary line.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：異文化交流、域間交流、河川、分水嶺、和人地、蝦夷地、祭祀形態、民俗芸能

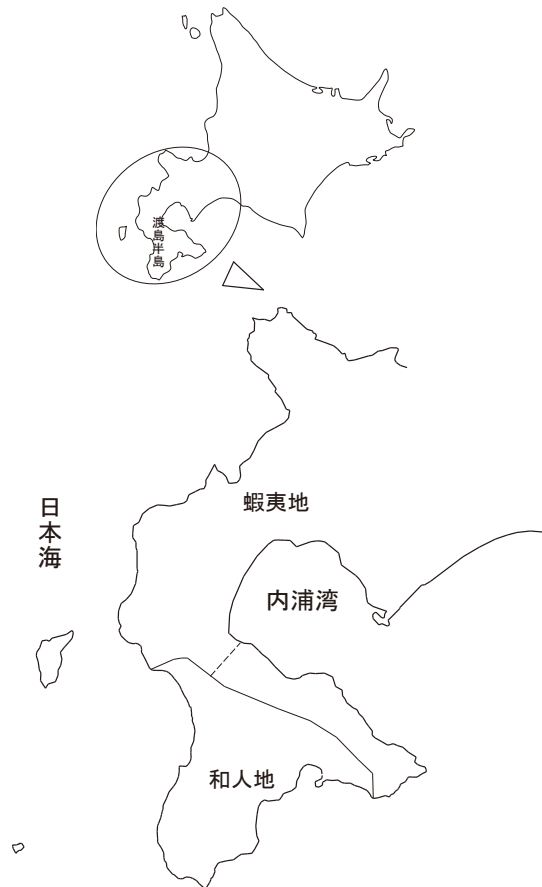
1. 研究開始当初の背景

近世期の北海道島は、和人(日本人)の居住地である和人地と、アイヌ民族の居住地である蝦夷地に区分されていた。北海道南西部にあたる渡島半島は、和人地と蝦夷地の境界があった地域である。基本的に和人は、漁期を除いて蝦夷地に越境し、越年することは難し

かったのである。

和人地と蝦夷地との境界は、固定化したものではなく和人とアイヌ民族間の力関係によって変動した。汐首岬にあった南端が18世紀末には山越内まで北上し、19世紀中期に近代国家が民族間の境界線を取り払うまで、渡島半島には、南部に和人の居住地、北東部

にアイヌ民族の居住地といった区分があったことになる。そして、和人地が拡大する前段には、汐首岬から山越内の内浦湾南域の沿岸部を中心に、アイヌ民族と和人が雑居した



地域もあった。これら異民族が接していた中で、経済活動や生活において、さまざまな文化接触があったといえる。

一方、渡島半島は、南北を背骨状に連なる山々によって東西域が分断されて、20世紀前半まで交通網が整備されていなかった。渡島半島の最短幅は50kmにも満たないが、地形の制約を受けて、近世期には相互の往来も容易ではなく、両地域の生活文化は異質な面が多くあったと考えられる。

渡島半島における蝦夷地と和人地の境界線の変動及び、和人とアイヌ民族の経済活動や政策史については、これまで文献史的な研究は進められているが、民俗資料を含めて検討したものは少ない。さらに、渡島半島では異民族間の境界が近代までみられたにもかかわらず、それぞれの民俗についての比較研究は進められていないのである。

渡島半島における民俗誌の初稿は、菅江真澄が18世紀後半に記した「えみしのさえき」と「えぞのてぶり」であり、ここでは和人とアイヌ民族の生活文化を示すとともに、和人地から蝦夷地に越境した和人や、越年して蝦夷地に定住化しつつあった和人の民俗を絵図と文章にしている。さらに、和人とアイヌ民

族の信仰に触れて、両地域の差異についても触れている。しかし、これ以降、アイヌ民族への注目は高まるが、蝦夷地に越境した和人の民俗資料について取り上げられていない。

近年では、国内外の博物館に収蔵されているアイヌ民族に関する資料調査が進み、渡島半島から収集されたアイヌ民族資料についても所在が明らかになっている。しかしながら、和人と交易品に加えて、和人が制作などに係わった「モノ」があるにもかかわらず、アイヌ民族資料として一括に扱われており、和人資料と相互に関連した研究がなされているとはいえない。

筆者は、2003年から5カ年で実施した北海道開拓記念館の分野別研究「北海道文化の形成と変容に関する民族・民俗学的研究—民俗芸能に見られる異文化要素を中心に—」と、2004年から4カ年で実施した科学研究費補助金による研究課題「北海道における民俗芸能の伝承に関する研究」(基盤研究(C)17520567)で、和人資料とアイヌ民族資料を視野に入れ北海道の民俗芸能をとらえなおした。特に、日本海側の檜山地方における鹿子舞の悉皆調査により、20世紀初期に不要となった和人の鹿子頭が、内浦湾側の落部川流域のアイヌ民族の手へ渡り、新たに異文化の遊戯の中で再利用した事例を報告した。さらに、檜山地方の鹿子頭の形態を比較し、アイヌ民族の遊戯に使われた鹿子頭が、厚沢部川支流の一つである安野呂川流域の鹿子頭と同型であること、渡島半島西側の安野呂川上流は分水嶺を経て東側の落部川上流と接していたことを指摘したところである。分水嶺に接した地域は、これまで交通路などの制約から往来が及ばないとみられた地域ではあるが、東西の地域間や異民族間を結ぶ鹿子頭の存在によって、両地域の民俗を異文化の接触・交錯という観点から再評価する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、近世期以降における北海道南部(渡島半島)の民俗を抽出し、異民族間交流や地域間交流を経て成立した生活文化の変遷過程を明らかにするものである。具体的には、少なくとも17世紀から現在まで日本海沿岸の檜山地方で伝承されている鹿子舞の頭のひとつが、20世紀初頭において渡島半島を東西に分断する背骨状の山々を越えて、内浦湾沿岸に居住するアイヌ民族に受け継がれていた事例を参考に、河川にかかわる信仰についても調査を進め、民族や地域を超えて再利用されてきた民俗資料群を提示することにある。さらに、菅江真澄が記した民俗を丹念に比較検討し、和人とアイヌ民族の交流の中で再利用されるに至った背景や経緯を明らかにする。そして、分水嶺をはさんで東

西に流れる両河川の信仰を3つの視点から対比し、日本の北辺において形作られた民俗事例について考察することにある。

①には、分水嶺に接する東西の河川流域に居住する人びとの信仰形態について、両者の連続性あるいは断絶を検討する。

②には、遊楽部川と見市川、野田生川と姫川、落部川と厚沢部川の3つの分水嶺に天の川と大野川を加えて比較し、それぞれの川筋における信仰形態の類似性や非類似性を明らかにする。

③にはカムイやイナウなどアイヌ民族の信仰形態の残存の有無について整理した。

3. 研究の方法

本研究の調査対象は、渡島半島の東西地域の主要な河川に祀られている神社と、それを取り巻く集落である。調査方法は、聞き取りを主眼においたフィールドワークであるが、あわせて博物館や郷土資料館において、河川や異民族間交流に係わる物質資料について調査を実施した。

研究期間中に調査を行った渡島半島の東西の主要な河川を北からあげると、内浦湾側が遊楽部川、野田生川、落部川、日本海側が見市川、姫川、厚沢部川で、それぞれ東西から分水嶺に接した河川である。これらの流域は、いずれも近代に入ってから道路が整備された。また、近世期から交通の要所であった、天の川と大野川の流域についても比較のため調査を行った。

この研究の時間幅は、18世紀末から21世紀までである。基礎資料は、菅江真澄が18世紀後半に描いた場面とする。その他には、19世紀中期の松浦武四郎の文献と、神社の奉納物や博物館における物質文化資料などで補強し、異民族間交流について時系列で明示する。さらに、該当する地域における四季の信仰や祭りにあわせて現地調査を実施し、日本の北辺における民俗の伝承について、分析及び考察を行うための基礎的資料とする。

民俗資料群のデータ収集においては、民俗の伝承に大きな影響を与えた、北前船とその寄港地において調査を行った。

4. 研究成果

平成21年度(2009)には、北海道南西部の渡島半島の噴火湾沿岸地域から、18世紀末を境に和人地の領域となった箱館六箇場所に該当する地域を選定し、明治初期に和人地と蝦夷地の境界線がなくなるまでの神社の祭祀の変遷過程を報告した(舟山2010)。ここでは、アイヌ民族と和人の異文化交流を示す民俗資料として、菅江真澄、松浦武四郎、菊池重賢の史料から神社祭祀と民間信仰を中心に抽出し、記載されたそれぞれの時代ごとの信仰形態を比較した。取り上げた3者の記

録は、違った目的意識を持って記載されたものであり、単純には比較の材料にはなりにくい。しかし、3者の記載には、同じ地域における最大約80年の時間差を読み取ることができる。しかも、蝦夷地に含まれていた頃に歩いた菅江真澄、和人地となってから歩いた松浦武四郎、異文化との境界線がなくなったあとに歩いた菊池重賢と、各人が違った状況下で、同地域の民俗を見聞したことになる。したがって、3者は、蝦夷地と和人地との境界域の変化、異文化間の境界がなくなる過程における祭祀状況を示していた。当然、神社や民間信仰についての記載は、生活文化の中の一部として示される神社と、神道の中での神社の見方とでは内容が全く違う。しかしながら、菅江真澄が記載した内容は、数量的には劣るものの、明神や賽の河原など今日の生活につながる信仰の情報が濃厚に示されていた。

平成22年度(2010)には、和人地の主要な地域のひとつであった檜山中南部の神社祭祀について、主に15世紀以降に和人地と蝦夷地に祀られた神社の由来を整理し、神社の分布地域と祭祀年代から特徴を抽出した(舟山2011)。神社の分布地域の特徴は、①に6割余が沿岸部や海岸段丘に沿って建立されているほか、厚沢部川と天ノ川流域には河口から上流部にも祀られている。②に鉾山などの山間部のほか、太田山、笹山、勝山のように山岳信仰にかかわる祭祀がみられる。

次に、祭祀年代の特徴は、①に17世紀前半以前には、熊石地区、乙部町、上ノ国町に、八幡神社が多く祀られている。②に17世紀



中頃以降から 18 世紀後半には、熊石地区、厚沢部町、江差町に、稲荷神、菅田別命、天照大神のほか、滝廻神社や川裾神社といった祓戸神など多様な祭神を祭祀している。③に 18 世紀末から 19 世紀中頃には、熊石地区を除く 6 地域において、稲荷神を多く祀っている。④に 19 世紀後半以降には、大成地区、奥尻町、厚沢部町、上ノ国町において、稲荷神や山神が祀られている。

平成 23 年度(2011)には、檜山地方北部の神社縁起について整理し、神社と祭神の分布地域と祭祀年代にかかわる 4 つの特徴を抽出した(舟山 2012)。①は、沿岸部や海岸段丘沿いの神社は、19 世紀中から後半の縁起が多い。②は、後志利別川や太櫓川など、河川の中流域の神社は 19 世紀末以降の縁起が多い。③は八幡神社は、今金町とせたな町北檜山区にみられたが、いずれも 19 世紀後半以降、開拓にあたって移住者の郷里から分霊を受けたものであった。

平成 24 年度(2012)は、分水嶺をはさんで渡島半島の東西に流れる両河川の信仰を比較検討した(舟山 2013)。

渡島半島西側の厚沢部川、姫川、天の川流域の神社祭祀は、下流域が 18 世紀末以、上流部が 19 世紀後半に祭祀されたものが多い。この地域の祭神は、八幡社、神明社、山神社、弁天社、稲荷社、恵比須社などに加えて、18 世紀初期以降には瀬織津姫命などを祭神とした滝廻社や川裾社といった祓戸の神が祀られている。

一方、厚沢部川上流の安野呂川・鶉川と分水嶺に接して対峙している渡島半島東側の落部川・鳥崎川流域の神社祭祀は、日本海側と同様に下流域の海岸段丘沿いに神社が祀られている。しかし、上流部における神社の祭祀は、渡島半島西側の河川と比べても少ないといえる。祭神においても、稲荷社を主体に、恵比寿社、八幡社などが多く祀られている。これは八雲町や長万部町における神社祭祀も同様の結果となる。18 世紀後半以降には、諏訪社や愛知県からの移民などが郷里と関わりの深い祭神を祀る事例もみられる。

さらに、厚沢部川上流の糖野川・佐助沢川・濁川と分水嶺に接して対峙している木古内川・茂辺地川・戸切地川・大野川流域の神社祭祀は、日本海沿岸と同様で、下流域に比べて上流部の祭祀年は新しい。祭神について厚沢部川、姫川、天の川と比較すると、18 世紀末以前から祓戸の神だけではなく御霊信仰にかかわる祭神も祀られている。

日本海、内浦湾、津軽海峡の海域に注ぐ河川の神社祭祀を厚沢部川の神社祭祀と対比した結果、17 世紀中頃以降から 18 世紀後半にかけて、松前半島から檜山北部までの日本海沿岸部には祓戸神や御霊信仰がみられるのに対して、内浦湾沿岸地域では確認できな

かった。特に川下社など祓戸神は、18 世紀後半以降になると日本海沿岸では檜山を越えて積丹半島においても祭祀されるに至るが、内浦湾側では全くみられないことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 舟山直治、「北海道南西部における異民族間交流史の民俗学的研究—渡島半島の日本海沿岸と内浦湾沿岸の神社祭祀を中心に—」、『北海道開拓記念館研究紀要』、査読無、第 41 号、2013、pp. 95-106。
- ② 舟山直治、「北海道南西部、檜山地方北部の神社祭祀」、『北海道開拓記念館研究紀要』、査読無、第 40 号、2012、pp. 155-106。
- ③ 舟山直治、「第 67 回特別展 伊勢神宮と北海道」、『北海道開拓記念館だより』、査読無、Vol. 40-1、2011、pp. 2-3
- ④ 舟山直治、「北海道南西部、檜山地方中南部の神社祭祀」、『北海道開拓記念館研究紀要』、査読無、第 39 号、2011、pp. 49-60。
- ⑤ 舟山直治、「和人地と蝦夷地の境界の移動にともなう神社祭祀の変遷」、『北海道開拓記念館研究紀要』、査読無、第 38 号、2010、pp. 43-54。
- ⑥ 舟山直治、「北海道への移住にともなう生活文化の変遷—北方四島元島民と中国帰国者について—」、『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—北方文化共同研究報告』、査読無、第 39 号、2010、pp. 169-180。

[学会発表] (計 1 件)

- ① 舟山直治、「18 世紀末から 19 世紀中頃における内浦湾沿岸の賽の河原」、日本民俗学会第 62 回年会、2010 年 10 月 3 日、東北大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

舟山 直治 (FUNAYAMA NAOJI)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：90181445